

OUR WAY OF LIFE

スケッチイーノ・潤子

市立川西病院勤務

私たち夫婦は、結婚11年目のありふれたカップルである。皆と少し違うところがあるとすれば、主人がイタリア系オーストラリア人ということだろうか。

結婚を決めた時、周りの友達は皆心配してくれて、「生活習慣の違いは埋められないらしいよ」とか、「言葉の壁は、大きいよ」等々、アドバイスをもらった。しかし私は「生活習慣が違っていただけ、お互い両方の生活の仕方が楽しめて面白いやん」、「言葉が分からなかったら、英語でも、イタリア語でも、教えてもらっちゃおう(主人は、自分の母親と話す時はイタリア語、学校にいる時や妹と話す時は英語と使い分ける生活を幼い頃からしていた)、その代わり、私の大阪弁を教えるよ」などと、友人たちとは逆に、お互いの文化の違いを楽しもうと考えていたのである。

それに、私は主人となら、一緒に色々なことを話したり、見たり、聞いたりしていけることを確信していたので、特に迷うことなく一緒になった。

「スケッチイーノ」式生活

結婚してからも私たち夫婦は、生活習慣の違いや文化の違いからの行き違いを起こしたことも、言葉の壁を感じたことも一度もない。

いつも、私たちの考え方、やり方、生活の仕方を、話し合い実行してきた。日本式でもないし、イタリア式でもない。「スケッチイーノ式」なのである。

食事は、パスタも食べれば、納豆も食べる。イ

ースターパーティーやクリスマスパーティーもするし、墓参りに行けば、草引きをする。お互い、別に強制されているのではなく、いつも自然体なのである。

私は結婚した当初、オーストラリアで、主人の母親とも一緒に2年間暮らしていたが、人種の違いを感じることはなかった。

気遣いも、優しさも万国共通だし、嬉しいときは笑い、悲しいときは泣く。怒っているときは、恐い顔をしている。全く同じなのだと思います。

主人の母親は、とてもよく働く人である。毎朝5時に起きて、畑仕事をし、鶏の世話をし、洗濯をしてから食事を作る。どんなに体調が悪くても、365日、朝寝坊をしたのを見たことがなかった。日中も畑に出て、自分の育てている野菜の世話をしたり、雑草を引いたり、鶏の世話をしたりして過ごしていた。そのように、黙々と仕事をこなしていく姿に感動したものだ。

義母の生活は、非常にシンプルだったが、日々の生活を楽しむこと、大切にすることを、自然体で実践していた。

大阪で育った日本人の私が、ナポリ育ちのイタリア人である義母から、多くのことを学んでいたのである。お互いにお互いを知ろうとし、尊敬し合えば、国籍なんて関係ないんだと実感した。

スーパーとうちやん

結婚して11年、3人の子供に恵まれた。小学校4年生の長男と、2年生の長女、4歳の二男である。



え。。

「スケッチャーノ式」では、休みの日はとうちゃん(子供たちは、父親のことをそう呼んでいる)が、3人の子供を引き連れてスーパーマーケットを巡り、食糧を買い込み、公園巡りをする事になっている。

また、私が夜勤の時は、とうちゃんが子供たちを習い事に連れて行き、食事を作り、食べさせ、風呂にも入れる。

子供たちの洋服、靴、下着、おもちゃ等も、とうちゃんが買い揃えている。したがって、子供の身の回りのことを、とうちゃんはよく把握しているのである。「保育所に着替えがないから、用意して持って行かないと」とか、「靴が小さくなっているから、買い替えないと」などと、私以上に子供のことをよく知っていて、子育てに奮闘してくれている。

スケッチャーノ家は、主人がいないと、何も事が進まない状態になっている。そういう訳だから、私の休みの日は、主人にもできるだけ自由な時間を持ってほしいと思っている。そして、たまには2人で外出したいとも思っているが、これは実現が難しい状況である。

その代わり、私たちはよく話をする。読んだ本の話や、自分のしたいこと、行きたい所、そして自分の夢について等々。

「それぞれの夢」

私の夢はというと――。

私は子供ができてから、“子育て”の原点とい

うべき、母乳育児に興味を持つようになった。これからの助産婦は、少子化、核家族化の進む現代において、母親への母乳育児へのサポートに、大きな役割を担っていかなくてはならないと信じている。そのために、新しい科学的な知識を学びたい。そして、その母親に合った楽しい子育てができるよう援助していききたい。それが、私の夢である。

主人の夢は、日本中を旅することだ。しかも、歩いて。日本中を旅して、色々な風景や人に出会えることを、楽しみにしている。そしていつか、旅をして見たもの、聞いたことを、思い出になるように文章にまとめてみたいそうだ。

主人は、いまだに子供のような、ロマンティックな心と冒険心を持ちあわせている人なのだ。彼の夢が実現できるよう、応援したいと思っている。

子供たちもそれぞれに夢を持っているようで、長男は、目下のところサッカー選手に夢中で、長女は、「ケーキ屋さんになって、お母ちゃんにいっぱいケーキ食べさせてあげるね」と楽しそうに話をしてくれる。そんな家族全員のそれぞれ夢を育みながら、家族全員で成長していきたいと願っている。

今回は、私の上司で、病院においては、様々な重要な役を涼しい顔でこなしつつ、家に帰れば4人の子供たちの優しい母親。暖かい心と、クールな頭脳を持った西森婦長にバトンを渡します。

(スケッチャーノ・じゅんこ)